

未来をつくる『人』を育てよう



わかる！ESDテキストブック シリーズ1

基本編

# 未来をつくる『人』を育てよう

ESDをこれから学ぼうという、学校教育、社会教育、民間教育、市民活動に関わる方の「ESDってなに？」という疑問に、誰もがシンプルに答えられるためにこの冊子をつくられました。

ここでは、あなたの教育や地域づくりにESDを活かすためのヒントがあります。ESDの概念やアプローチ手法はこれからも、どんどん変化を遂げていってください。あなたも一緒に、地球の未来のために必要な「人」の育て方について考えてください。



NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J) 編

NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J) 編

定価 500円(本体476円)  
2006年12月発行



## はじめに

このテキストブックは、皆さんに「持続可能な開発のための教育 (ESD)」をもっと知っていただきたい！という目的でつくりました。特に学校教育や社会教育、地球の課題に取り組む市民教育に関わる方、地域で市民活動に関わる方に、ESDの基礎的な理解を促す構成となっています。とかく「概念的でわかりにくい」と言われるESDですが、本書は「日本で一番わかりやすいESD解説書」を目指して、できる限り平易な解説を試みました。また、ESDに関するセミナーや講習会、大学の講義の副読本としても使っていただけることを考慮した構成となっています。

私たちは、「ESDとは、地球や地域のためにみずから社会を変えようと行動する『人づくり』である」と考えています。けれども、ESDのとらえ方やアプローチの仕方は、地域の特性や活動の目的によって少しずつ異なります。私たちはむしろそのような多様なあり方がよいと考えています。そうした特徴やお互いの差異を尊重した上でESDに取り組んでいただくことで、教育や市民活動の担い手の方々の連携が進むのだと考えます。そして、持続可能な社会に向けた教育というものが、今よりも総合的に取り組まれ、皆さん方の活動にもさらなる広がりが生まれるものと信じています。

これを機に、読者の皆さんと共にESDの実践方法を考えていきたいと思えます。そして、皆さんの教育や活動がより発展的に広がることを願っております。

ESDテキストブック編集チーム一同

# CONTENTS

## 第1章 地球の未来のために

1. 持続しないもの…… 4
2. 豊かで人間らしい暮らしを考える 10
3. なぜ「教育」なのか？ 14

## 第2章 ESDという教育

1. ESDという教育の大きな枠組み 18
2. ESDの進め方 26
3. すでにスタートしているESDの取り組み 33

## 第3章 学びの場のデザイン

- 学校と地域のつながりが育む、伝統という学び 38
- 浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生による  
ミューラル・プロジェクト 42
- 地域に学び 地域に還す  
富山高専学生・学校・地域の学びの連鎖 46
- 放置自転車で平和構築  
松山の「銃を鋤へ」プロジェクト 50
- 先人の「不屈の精神」と「住民自治」に学ぶ  
震災復興に挑む山古志村 54

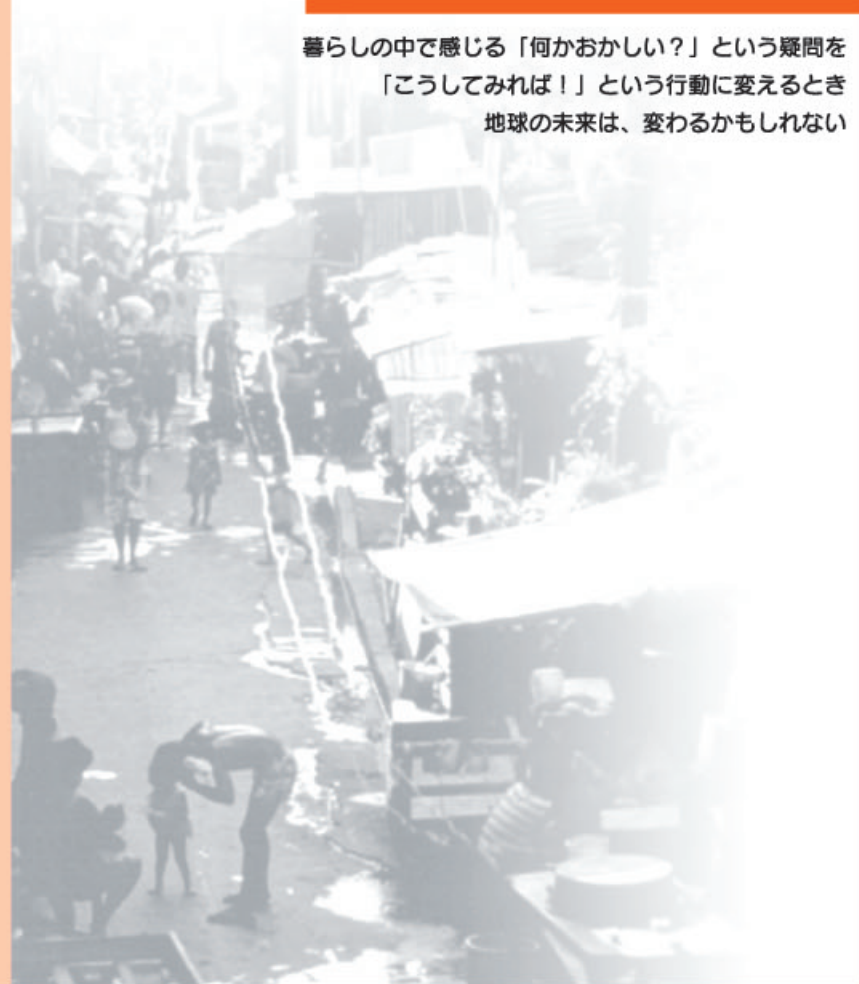
おわりに 60

出典一覧・関連サイト 61

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)の  
活動と入会のおすすめ 62

## 第1章 地球の未来のために

暮らしの中で感じる「何かおかしい？」という疑問を  
「こうしてみれば！」という行動に変えるとき  
地球の未来は、変わるかもしれない



## 私たちの地球では今、何が起きているのでしょうか？

私たちは、日々の暮らしがこのまま続いていくのが当たり前だと思っています。一見平穏で、便利で、豊かな暮らし……。しかし、本当にそうなのでしょうか？



©Shinji Shinoda/UNDP Tokyo

ここに挙げたことは、私たちが暮らすこの地球で実際に起きていることです。温暖化や環境破壊、貧困、紛争など、地球規模で何か取り返しのつかない状況へと進んでいるような印象を受けます。

しかし、「実感が伴わない」「話を聞くと驚くけれど、翌日にはそのことは忘れてしまう」「自分たちの暮らしに精一杯で余裕がない」、日本の多くの人たちの反応はそのようなものではないでしょうか？

だから重大な問題があることにうすうす気がついていても、具体的な行動に踏み出す人が限られているのではないかと思います。

しかし、これらのできごとは私たちの「ふだんの生活」からそれほど遠くのできごとではないのです……。

### 「食」から見る持続しない社会

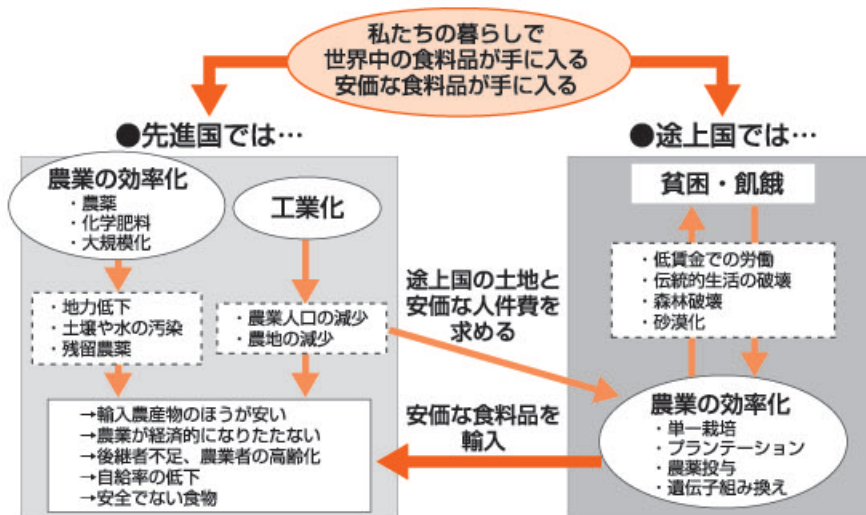
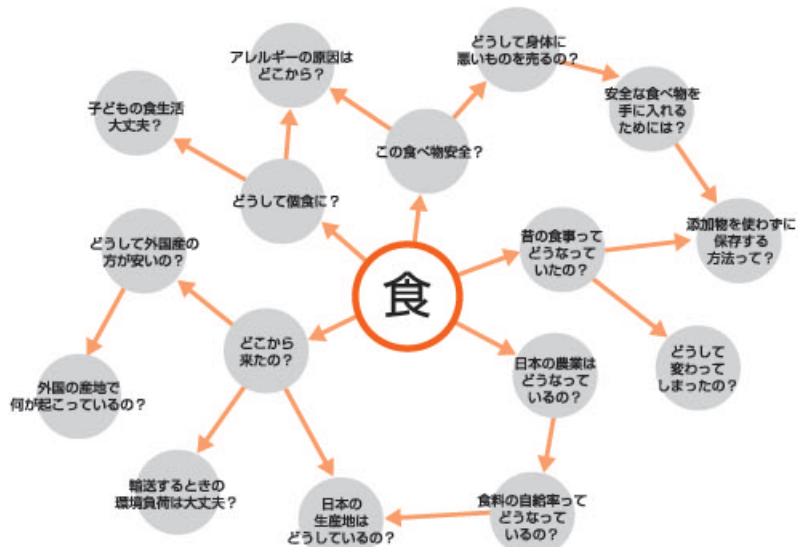
私たちが生活のいろいろな場面で「何かおかしいな?」と感じること、あるいはふだん当たり前だと思っている現象の先にも、地球規模の重大な課題は存在しています。ここでは「食」を例として持続しない社会について考えてみましょう。

私たちの身の回りには、食べるものがたくさんあふれています。スーパーやデパート、レストラン、どこに行っても、お金さえ出せば世界中の食料品が手に入ります。またファーストフード店や100円均一の食料品店などでは、安価な食料

品をたくさん販売しています。これは、一見とても豊かな食生活と言えなくもありません。しかし、このような食生活を支えるために、その裏では大変なことが起こっています。

#### 身近な「何かおかしい?」「ちょっと不安」マップづくり

身の回りには安くてたくさんの食べ物があふれているけど…  
食に関する疑問をつなぎ合わせてみてください。



私たちの食生活からわいてくるさまざまな疑問。その「何かおかしい?」の原因をひもといていくと……。

狭い国土で大量の作物を調達するために、日本の農業は大規模化、単一化し、大量の化学肥料と農薬を使い、効率化を押し進めました。その結果、農家は大型の農機具を購入するために借金を背負い、小規模で多様な農作物を少量ずつ生産する日本の従来型の農業は置き去られてきました。しかも、生産力を上げるために使われた化学肥料や農薬は、土壌や河川を汚染し、生態系に悪影響を及ぼしました。さらに農業から工業への転換政策と人口の増加により、都市部での宅地化や過疎地での農地の荒廃が進み、戦後600万ha存在した農地は、人口が倍近い現在

において500万ha以下と逆に減少していききました。

この流れと逆行して、安い食料が海外から大量に輸入されてきました。そして、それは大規模な単一栽培やプランテーション農業に支えられています。

もちろん、食料輸送は化石エネルギーを使い、大量のCO<sub>2</sub>を排出しています。

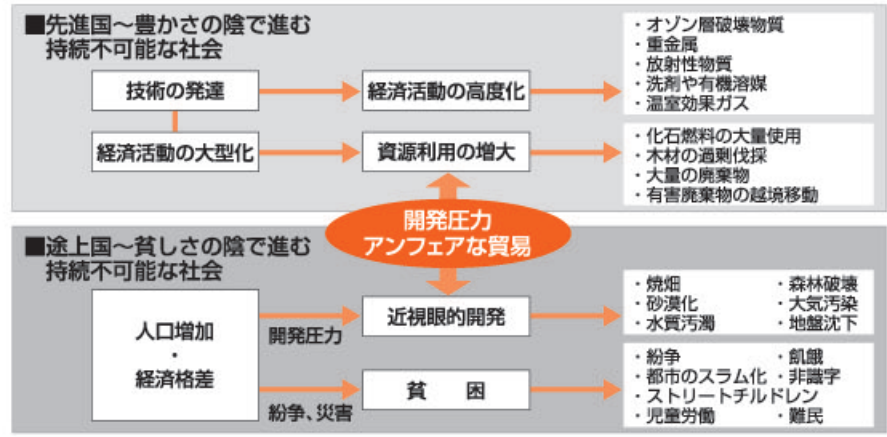
また、とりわけ途上国では、森林が次々に開拓され、大量の農薬が使用され、現地の女性や子どもは低賃金で労働を強いられ、世界の国々の村で続いてきた伝統的な生活が失われるなど、大きなダメージを受けました。しかも、世界の穀物の生産量は、世界中の人びとが生きるために十分な量があるにもかかわらず、途上国では1日に2万4千人もの人が餓死し

ているのです。  
 そして、この負の連鎖は国内へも影響を及ぼします。1960年ごろは80%だった日本の食料自給率は、農地の減少と安価な海外からの食料への依存により、いまやカロリーベースで40%、飼料を含む穀物自給率は28%しかなくなりました。さらに安い作物や飼料穀物の輸入により、日本国内の農業は経済的に苦境に立たされ、農業人口は1960年代の4分の1まで減少してしまいました。しかも、その半数は60歳以上の高齢者という深刻な後継者不足に陥っています。  
 また、大規模単一栽培で大量の農薬を使用した農産物、遺伝子組み換え飼料で

育った家畜など、安全性に疑問がある食べ物が世界から集まり、私たちの健康自体も脅かされている状態です。  
 その他にも、食生活の変貌により、生活習慣病が深刻になり、アレルギーに悩む子どもを急増させ、子どもの体力低下や生活習慣病（成人病）が現実化しています。このように、ライフスタイルや経済的な要因に依存した食の問題も見逃すことはできません。  
 これでも、本当に豊かな食文化であると感じられるでしょうか。私たちの毎日の生活に欠かせない「食べ物」の裏側には、こうした矛盾や世界的な相互依存の関係が存在しています。

**持続不可能性は構造的なもの**

食を例に挙げた通り、私たちの暮らす社会の問題はさまざまな要因が複雑に絡み合っています。ここでは、先進国と途上国の持続不可能な社会の関係をもう少し構造的に整理してみました。



先進国の生活は、経済活動の大型化・高度化、技術革新によって、非常に便利になりました。しかし、その過程でさまざまな汚染物質を排出し、大量の化石燃料を消費しながら、重大な環境問題を引き起こしました。  
 一方、途上国は人口増加、紛争、災害などにより生じた貧困が目の前の利益だけを求めるような近視眼的な開発を誘発します。さらに経済のグローバル化により、先進国の開発圧力が持続不可能な開発に拍車をかけます。また、先進国に有利でアンフェアな貿易が、途上国の貧困や経済格差を一層悪化させているのです。そのように起こった開発と貧困は、途上

国の環境を破壊し、飢餓や紛争など多くの社会的問題を引き起こしています。  
 このように、持続不可能な社会の要因は、環境的な要素（温暖化、森林の消失、砂漠化、種の絶滅、化学物質による汚染…）、社会的な要素（飢餓、紛争、差別、健康被害、伝統的な暮らしの破壊…）、経済的な要素（貧困、グローバル化、効率化、大規模化…）が複雑に関係しています。  
 このような持続不可能な社会を変えるためには、環境の問題や貧困の問題を個別に解決しようとしても限界があります。もっと社会全体のしくみを変えるような取り組みを行わない限り、根本的な解決は難しいと言えるのです。

**まとめ**

- ・ 環境的、社会的、経済的な世界の問題は極めて深刻
- ・ 社会の問題はさまざまな要因が複雑に絡み合っている
- ・ 私たちの生活も、世界的な問題と関わり合っている
- ・ 個別の問題の解決だけでは、根本的な解決は難しい

# 2 豊かで人間らしい暮らしを考える ——持続可能な社会とは——

## 持続可能な社会とは

では、持続可能な社会とはどのようなものなのでしょうか？どうすれば現在の持続不可能な状態を抜け出すことができるのでしょうか？

持続可能な社会について、再び前項で挙げた「食」を例に考えてみましょう。

例えば、毎日の食卓には地域でとれた新鮮な食べ物が並ぶ。生産者だけでなく地域の人たちも生産活動に参加し、季節感や収穫の喜びを感じながら食べ物をいただく。地元の生産物を優先するので、輸送のエネルギー消費が減る。それらの生産物は農業や有害物質を抑え、安全性に配慮され、また継続して生産が続けられるような、長期的な視点に立った生産方法がなされている。生産者にも経済的に無理のない生活が営めるような配慮が社会全体でなされている。昔から培われた知恵やその土地の食文化を大切にしながら、現在のニーズに合った食文化を築く。やむを得ず海外から生産物を輸入する場合でも、公正な取引を心がける。海外の生産地でも、環境や人権を考えた生産活動が行われている。

このような状態こそが持続可能で豊かな食文化と言えるのではないのでしょうか。現在のような手軽さ、便利さはないかもしれませんが。何らかの制限もあるでしょう。しかし本来人間が感じていた喜びも

多く取り戻せるに違いありません。そしてその喜びをすべての人と生物で平等に感じたいものです。

経済優先の価値観を改め、環境の持続性と社会的な公正を優先し、経済的な弱者へも配慮がされている、そのような社会が持続可能な社会と言えるでしょう。

しかし、これらを実現することは非常に困難です。そのためには、人びとの価値観や生活スタイル、生産のしくみや流通のしくみ、企業活動のあり方など、とても大きな変化が必要です。そして行政による支援体制や法整備、国際的な貿易ルールなどの変更も必要でしょう。

個人の意識や行動を変えるだけでこれを実現することは難しいでしょう。このような大きな変化を起こすためには、さまざまな立場の人たちが集まり、持続可能な社会のビジョンを話し合い、ビジョンの具体化へ向けて、お互いに協力しながら、それぞれの立場で行動を起こすことが大切です。そしてその取り組みが世界的に連携を図りながら、社会全体に広がっていくことが重要なのです。

## 人と地域が生き生きとするもの

持続可能な社会をつくるためには、足元からの行動が大切。身近な社会（地域コミュニティ）に働きかけることから変化は始まります。

地球規模の問題を解決するためにも、変化を生み出すのはまずは地域からです。世界のそれぞれの地域が持続的でなければ、地球規模の持続性は実現しないでしょう。「Think Globally Act Locally (地球規模で考え足元から行動しよう)」、語り尽くされた言葉ですが、持続可能な社会をつくるためにはとても重要なキーワードなのです。

住民が地域に誇りと愛着を持ち、持続可能な地域の姿を自分たち自身で描き、地域の人たちが密接に関わりながらその実現に取り組んでいる、そのような活気にあふれたコミュニティを想像してみてください。自分たちの未来を自分たちでつくっているという達成感、住民同士がお互いに認め合い、励まし合いながら、

同じコミュニティの一員として暮らす社会。

そのような小さなコミュニティが世界の各地で発生し、お互いにつながり合い影響し合う。そのコミュニティ間でさらに大きなビジョンを描く。そうやって持続可能な社会をつくろうとする取り組みが世界に広がっていくことはとても素敵なことだと思います。



一人ひとりが「おかしいな」「もっとこうだったらいいのに」ということを声に出して、お互いに話し合えば、結構仲間はあるものです。仲間を集めて「おかしいな」ということを探求して、自分たちができる取り組みを始めてみる、というところから、「持続可能な社会」は始まるのだと思います。

## 持続可能な開発 (Sustainable Development)

国際的には、世界中の人びとや将来世代の人びと、みんなが安心して暮らすことのできる社会をつくるための行動を「持続可能な開発」と呼んでいます。

「持続可能な開発」は、国連「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」が1987年に発表した報告書『Our Common Future』の中で提唱された概念です。「将来世代が必要とするもの（ニーズ）を損なうことなく現在の世代が必要とするもの（ニーズ）を満足させる開発」という定義は、その後、多くの人びとによってさまざまな解釈がなされつつ、世界中に広がっています。

「持続可能な開発」は、「環境・社会・経済のバランスのとれた開発」であるとも言われます。

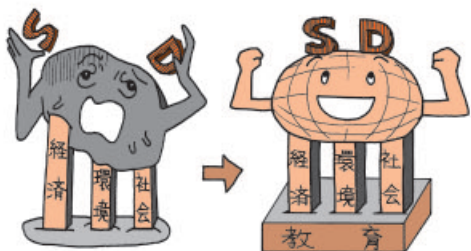
ここでいう『環境』とは、人間を含むすべての生物を支える、大気・水・土壌・食料などの資源を提供する自然システムのこと。この自然システムが壊れる

と、地球上すべての生命維持のしくみが失われることにもなりかねません。

『社会』とは、文化的に適正な方法で人びとが共存するために、家族・地域社会・そしてさらに大きな支援を提供する社会システムのこと。世界中のあらゆる人が、食料、衛生的な住環境、教育、健康などを享受できるしくみづくりが大切で、平和と公正はその基礎となります。

『経済』とは、ものやサービスの製造や提供に伴う金銭・取り引き・所有権・売買等に関するルール、人びとに生活手段（仕事や収入）を提供する経済システムのこと。適正な開発は人びとが長期的に自活するために必要ですが、近現代の経済システムは、貧富の格差を拡大し、地域社会と自然を破壊するという弊害を生み出してきたことも否めません。

したがって「持続可能な開発」では、経済成長を重視しすぎていた開発のあり方を問い直し、自然システムを保全できる範囲で、社会システムを維持・充実させる、3つの“E”（環境：Ecology、社会的公正：Equity、経済：Economy）のバランスがとれた開発へとシフトしていくことが求められているのです。



また「持続可能な開発」では、社会のしくみをつくっていく過程に、その社会の構成員が参画していくことが重要であると言われていています。そしてそれを可能にするために、人びとに「社会に参画す

る力」を育むこと、すなわち4つ目の“E”（教育：Education）が「持続可能な開発」には欠かせないのです。この点については次項で述べましょう。

### まとめ

- ・ 持続可能な社会とは、環境と社会と経済のバランスのとれた社会
- ・ 持続可能な社会の実現には、多様な人たちでビジョンを描き、構造的に社会を変える行動が必要
- ・ 地球規模の問題も、変化を遂げるのは地域から
- ・ 自然環境との共生、社会的な公正、経済的発展と公平性を視野に入れた、新しい社会づくりの概念を「持続可能な開発」という

### ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals:MDGs)

国際社会における緊急の課題解決の指標として、2000年9月に国連ミレニアム・サミットで採択されたミレニアム開発目標があります。これは2015年までに国際社会が達成すべき8つの目標、18の数値的ターゲットが挙げられています。この8つの目標は、持続可能な社会を考える上で視野に入れなければならないとても大切な指標であると言えるでしょう。

- 1 極度の貧困と飢餓の撲滅
- 2 普遍的初等教育の達成
- 3 ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
- 4 乳幼児死亡率の削減
- 5 妊産婦の健康の改善
- 6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止
- 7 環境の持続可能性の確保
- 8 開発のためのグローバル・パートナーシップの推進

[www.undp.or.jp/aboutundp/mdg/](http://www.undp.or.jp/aboutundp/mdg/)



# 3 なぜ「教育」なのか？

## 持続可能な社会を担うのは「人」です

持続可能な社会を実現するためには、その社会づくりの過程に、あらゆる世代・あらゆる立場の人びとが参画していくことが大切です。

持続可能な社会を実現するためには、社会のしくみを変えることを地球全体で進めていく必要があるということを述べてきました。そのためには、多様な立場の人たちによる、多様な取り組みが必要とされるでしょう。だからこそ、何よりも社会全体にそのような「行動を起こす人」を増やすことが大切です。先進国にも、途上国にも、都市にも、農村にも、そのような人が地球全体に増えていくことで、社会のしくみを変革していくことが可能になるでしょう。

社会の問題を知っているだけではなく、具体的な行動を起こすことのできる「人」を増やす。すなわち、世界の人たちやこれから生まれる人たちのことを視野に入れ、また環境との関係性の中で生きてい

ることを認識し、よりよい社会づくりに「参画」するための力を育む教育がとても重要なのです。

そして、そのような教育活動を世界中で行おうということで2002年に国連総会で採択されたのが、「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）の10年」です。英語の頭文字をとってESD（イー・エス・ディー）と呼ばれています。この「ESDの10年」は日本の政府とNGOが共同提案をしたものです。「ESDの10年」のキャンペーンは2005年からすでに始まっており、世界各国でそれぞれの取り組みが行われています。もちろん日本でも全国でESDについてさまざまな取り組みがスタートしています。

### ■ ESDとは ■

「持続可能な開発のための教育」Education for Sustainable Developmentの略です。持続可能な社会の実現を目指し、私たち一人ひとりが、世界の人びとや将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、よりよい社会づくりに参画するための力を育む教育です。

## 総合的な取り組みとするために

持続可能な社会の担い手を育てるために、さまざまな教育分野の担い手が、連携して取り組む必要があります。

持続可能な社会の担い手を育てる教育は、ESDという概念が提唱されるずっと前から、すでにさまざまな形で行われてきました。それは、環境教育、開発教育、福祉教育などの社会の課題に取り組んできた教育であり、公民館などで行われている社会教育や、現在学校で行われている総合的な学習の時間の中でも取り組まれています。また地域づくりや自然保護、国際協力などの活動も、教育を目的としてはいなくても、結果的に持続可能な社会を担う人材を育成してきたという側面があります。

「ESDの10年」は、そのような教育や活動を世界中の国々で、より総合的に取

り組もうというキャンペーンです。社会の構造を変えるための人材育成には、さまざまな分野の価値観やノウハウが必要となります。そして、各教育の担い手が分野を超えて協力し合い、持続可能な社会の姿を模索し、そのために必要な人材育成の価値観や将来的なビジョンを共有することが大切です。そうすることによって、個々の取り組みで培われてきたノウハウや人材がより大きな力としてつながり合い、持続可能な社会の実現がぐっと現実近づいてくるのです。

次の章では、このESDという教育の枠組みや実践方法について、もう少し具体的に解説していきましょう。

## まとめ

- ・持続可能な社会は、社会の構造を変えようと「行動する人」の存在が重要
- ・「行動する人」とは、自然との共生や多様な立場を尊重できる価値観を持ち、問題解決能力に富んだ、よりよい社会づくりに参画する人
- ・そのような人を育てる教育を「持続可能な開発のための教育（ESD）」と呼ぶ
- ・ESDの10年という国連のキャンペーンが2005年から始まっている
- ・これは日本の政府とNGOが共同で提案し、国連で採択されたもの

## 第2章 ESDという教育

あなたの行う「教育」には  
どのようなメッセージが込められていますか？  
どのような人を育てたいと考えていますか？



# 1 ESDという教育の大きな枠組み

## ESDが目指す「人」づくり

ESDは、持続可能な社会をつくるための価値観を養い、社会づくりに参画する力を育むことを目指しています。

### 確認シート

あなたの教育や活動で大切にしている「価値観」はどういったものですか？

どのような「能力」を育みたいと思いますか？

皆さんが実践している教育や活動では、どのような人を育てようとしていますか？どのようなメッセージを込めていますか？

ここでは、ESDを通じて育みたい「価値観」と「能力」を整理してみました。

### ESDが大切にしている「価値観」

- 人間の尊厳はかけがえがない
- 私たちには社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
- 現世代は将来世代に対する責任を持っている
- 人は自然の一部である
- 文化的な多様性を尊重する



### ESDを通じて育みたい「能力」

- 自分で感じ、考える力
- 問題の本質を見抜く力／批判する思考力
- 気持ちや考えを表現する力
- 多様な価値観をみとめ、尊重する力
- 他者と協力してものごとを進める力
- 具体的な解決方法を生み出す力
- 自分が望む社会を思い描く力
- 地域や国、地球の環境容量を理解する力
- みずから実践する力



皆さんが書きだしたものとどのくらい一致したでしょうか。持続可能な社会づくりに参画するための価値観や能力はこの他にもあるかもしれません。しかし大切なことは、単なる知識の習得ではなく、価値観の変容や、よりよい社会づくりに参画するための力を育むことに結びつい

ているかどうか、ということだと思いません。教育“Education”の語源は“Educe（引き出す）”です。学習者が本来持っている内なるものに働きかけ、自発的な価値観の変容や行動を引き出すことができるか。ESDを実践する上で常に意識していきたい重要なポイントです。

### ESDを理解する

#### ポイント 1

- ・学習者がみずからの価値観を見つめ直し、再構築できるような教育
- ・自分の考えに基づき、主体的な行動を起こすことにつながる教育

## 「ESD」はどこで行われるものか？

ESDは学校や地域、企業など、あらゆる教育の場、そして市民活動の場で実践することが期待されています。

学校におけるESDは、総合的な学習の時間はもちろん、すべての教科を通じて実践することが求められています。また公民館や博物館などの社会教育施設における教育活動も、ESDを実践する場として重要でしょう。もちろん環境、開発、人権、福祉などの社会的な課題に専門的に取り組む教育活動も、ESD的な学びの場です。また、企業の社員教育などもESDを実践する重要な場だと言えます。

そして、地域づくりや国際協力といった市民活動は（それが教育を目的としていなくても）、まさに実践的なESDを行う場であると言えるのです。それぞれの場によって、扱うテーマや取り組み方は変わってくるでしょう。しかしさまざまな教育の場において、持続可能な社会づくりに参画する「人」を育成することが求められていることは共通しているのです。



### ESDを理解する

ポイント  
2

ESDは学校教育、社会教育、市民教育、企業内教育、市民活動などすべての教育の場において実践されることが求められている

## ESDは誰が担うものなのか？

持続可能な社会の実現には、多様な考え方や立場を理解し、よりよい社会のあり方を探っていく作業が必要です。ですから、持続可能な社会を担う人を育てるESDもまた、さまざまな立場の人が関わり合いながら進めていくことが大切なのです。

ESDという教育の対象は子どもだけではありません。現在の社会を支えている大人こそが、社会の課題に目を向け、よりよい社会をつくるために学んでいく必要があります。そして大人も子どもも、お互いが対話をし、共に学び合うことが大切です。

ですから、教育の担い手は積極的に地域の人びとと連携し、学びの場をつくってほしいと思います。ESDではさまざまな分野の教育関係者はもちろん、行政機関、地域のNPO、農林漁業の従事者、自治会、

企業、大学の研究者など、学習のテーマや地域の課題によってあらゆる人が教育の担い手になり得ます。多様な人びとが、それぞれの価値観やノウハウを持ち寄ることで、より豊かな学びの場が生まれ、具体的な課題解決や地域づくりにもつながるでしょう。

そして、このように多様な立場の人たちが集い、共に未来を考え、合意形成をしながら、行動するという一連の過程が、問題解決型の思考やコミュニケーション能力を育むのです。



### ESDを理解する

ポイント  
3

ESDは、子ども、大人、そして地域のあらゆる立場の人たちが対象であり担い手である。ESDはお互いが対話し、共に学び合うことを重視している

## コーディネーターという、学びのデザイナー

ESDを進めるに当たり、重要な役割として、コーディネーターというつなぎ役の存在が挙げられます。学習のテーマや課題に合わせて、適切な組織を結びつけ、必要な専門知識を有する人を巻き込む、まさに学びの場をデザインすることがその役割です。また、コーディネーターは、学校でESDを進めるときにも大切です。すでに、一部の先生たちは地域とのつながりを意識して、学校と地域を結ぶ役割を果たしています。そのような活動が全国に広がってほしいと思います。

コーディネーターはどこの組織に属していてもよく、場合によっては個人でも、組織でもよいと考えます。

そして、市民参加型の学びを継続的に実施するためにも、行政にはこのようなコーディネーターの雇用を含め、地域でESDを進める体制のサポートが望まれます。



## ESDが取り組むテーマ

地球温暖化や貧困、平和など、世界が取り組むべき地球規模の課題から、福祉や多文化共生、環境まちづくりなど、地域の身近な課題まで、ESDはさまざまなテーマに取り組みます。

貧困、人口、人権、平和といった国際的な課題や、環境、福祉、多文化共生などの地域の課題に対応して、これまで環境教育や開発教育、人権教育などの教育が進められてきましたが、ESDという概念をきっかけに、これらの個別の教育が相互不可分の関係にあることが理解されるようになってきています。ESDでは、それぞれの教育を入り口に、国際的な視野と地域的な視野を大切にしつつ、さまざまなテーマに総合的に取り組んでいくことが期待されています。

ただ、多様なテーマに展開することを目指すからといって、あれもこれもと最初から盛り込む必要はありません。身近な疑問や興味・関心など、学習者にリアリティのある具体的な課題から始め、学習の内容を深めたり、活動の仲間を広げることによって、テーマも自然と広がっていく可能性を持っているものです。

そのためには、教育プログラムにあらかじめ「答え」を設定しないことが大切

です。ある一つのテーマを深く探求し、さまざまな取り組みを実践していく中で、深いところまでつながっている別の課題を発見したり、新たな興味が広がったりしていきます。そうすることで扱っている問題の複雑さと構造を理解し、根本的な解決に向けた活動を生み出すことにつながるのです。

教師やファシリテーターは、そのような学習者主体の出会いや探求をさまざまな刺激で促す役割を担うことが求められます。そのためにも、取り組もうとしている課題が社会の大きな構造の中でどのようなつながりを持っているのか、俯瞰した目で捉え直し、その分野の組織や人とつながっていくことも必要でしょう。



## ESDを理解する

ポイント  
4

ESDは分野を超えた多様なテーマを対象とするが、必ずしもすべてを一度に扱わなくてもよい。一つの課題を掘り下げることでおのずとつながってくるテーマに、総合的に取り組むことで実現できる

### ESDが大切にしている「学びの方法」

ESDという教育の進め方は多種多様です。しかし、大切にしたいと考えている「学びの方法」があります。

ESDは実践する場の状況、対象者、目的など、条件によってその取り組み方は多種多様です。しかし、社会に主体的に関わり、行動する人を育むためには、い

くつかの大切にしたいと考えている「学びの方法」があります。それは以下のようなことです。

#### ESDが大切にしている「学びの方法」

- 参加体験型の手法が活かされている
- 現実的課題に実践的に取り組んでいる
- 継続的な学びのプロセスがある
- 多様な立場・世代の人びとと学べる
- 学習者の主体性を尊重する
- 人や地域の可能性を最大限に活かしている
- 関わる人が互いに学び合える
- ただ一つの正解をあらかじめ用意しない

皆さんの実践している教育活動と通じるところはどのくらいありますか？

### 知識伝達型の教育とESDの学び方の違い

学校での基礎教育はESDを行うベースとして必要であることは言うまでもありません。また専門的な知識なくして、持続可能な社会の実現も不可能でしょう。しかし、一方的に知識を伝達する教育（知識伝達型の教育）だけでは、問題解決型の思考や、多様な考えを尊重しながら合意を得るような高いコミュニケーション能力を育てることは難しいでしょう。講義形式の教育方法に対して、ESDは体験、対話、協働を重視しています。そして、教える側から学ぶ側へ知識を転移するのではなく、学習者同士が互いに対話し、参加し、行動することを通して学習を進めることとなります。教育の担い手には、そのような対話や参加を促す場をつくる能力が必要となってきます。

知識伝達型の教育の方法		ESD的な学びの方法
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義形式（知の移転）</li> <li>・ 画一的</li> <li>・ 過去（学問的所産）を学ぶ</li> </ul>	教育の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体験／対話／協働形式（知の獲得と創造）</li> <li>・ 多様な</li> <li>・ 過去から学び、現在を学び、未来を創る</li> </ul>
「教える－学ぶ」という上下関係	学習者と指導者の関係	協働的な探求者の関係
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知識、教養を身につける（個人の変化）</li> </ul>	予想される学習効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 能力と価値観を身につけ、行動につながる動機づけを得る</li> <li>・ 地域や社会も変化する（個人、地域、社会の変化）</li> </ul>

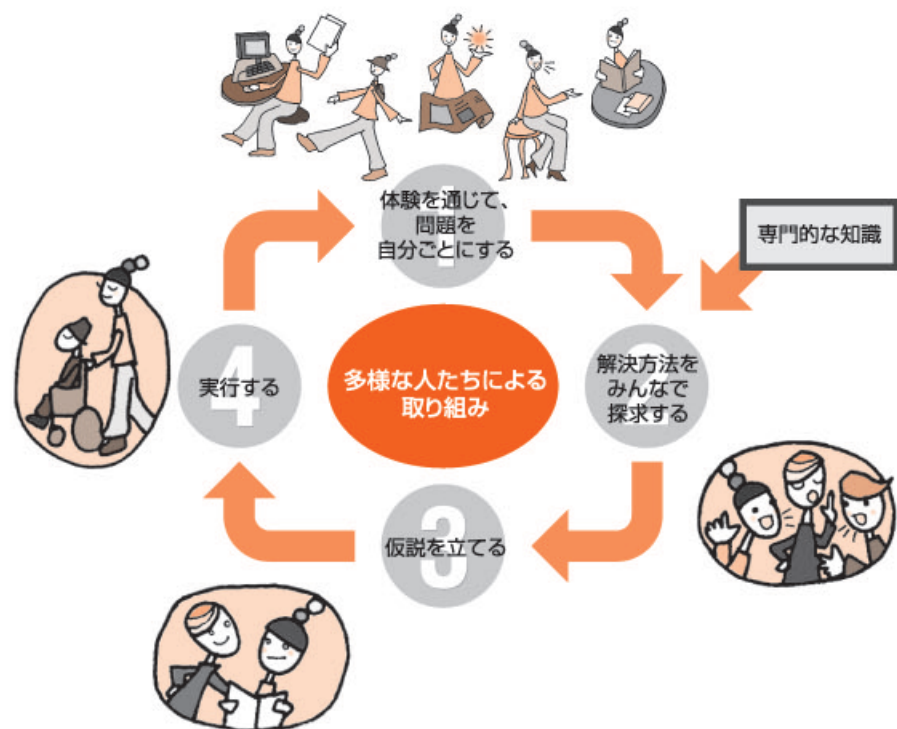
# 2 ESDの進め方

## ESDのデザイン例

ESDの具体的な進め方は、前述のように地域の状況や対象者、目的、テーマなどによってさまざまです。ここでは一つの問題解決型の学習モデルを使って、デザイン上のポイントをお伝えしましょう。

ESDの進め方の画一的なモデルというものは、今のところ存在しません。教育の担い手と参加する多くの学習者で、その活動に合った方法や進め方を模索すること自体が大切なステップでもあるで

しょう。しかしESDの理解を容易にするために、一つのモデルを掲げます。この例を参考に、ESD的な教育のデザインのイメージについて述べたいと思います。



このようなサイクルを継続して行うことが大切です。

### (1) 体験を通じて問題を「自分ごと」にする

ESDは問題解決型の学び方を重視していますが、突然学校の授業で地球の温暖化の事実を伝え、「さあ、あなたならどうしますか?」と投げかけ、解決方法を考えたとしても、それはその場限りのものになってしまいがちです。本当にその人が、問題意識を持ち、解決しなければと感じ、主体的に解決方法を考えることが重要です。そのために、導入において何らかの心の揺さぶりが欠かせません。それは、知識としてではなく、何らかの「体験」から得られる驚きや発見、感動などがとても有効であると言われています。

取り組む課題が身近な地域の問題であ

れば、問題を自分ごとにすることは比較的スムーズに行われるでしょう。しかしESDの課題は地域に限ったことではありません。より国際的なテーマを取り上げる場合、どのような導入や体験を通じて参加者に問題を自分ごとにしてもらうか、というデザインがとても重要です。

また、単なる体験だけで終わってしまうような学習が見られることもあります。しかしそれだけでは、価値観の変化や行動する能力を育てることにはつながらないでしょう。そのような学習効果を生むためには、次のステップとして具体的な探求と行動を伴うことが大切です。

#### 体験とは？

環境教育では、森や干潟に出かけてそこに棲む生き物を観察したり、雑木林の手入れやお米づくりに取り組んだり、自分の家から出たゴミを調べたり、さまざまな体験を通して、自然と人、環境問題と私たちの暮らしのつながりを考えるきっかけを提供しています。

また、開発教育が扱う発展途上国の問題などは、直接現場に行って体験することが難しいため、写真を見て話し合ったり、ロールプレイングゲームを行うなどの疑似体験を通して、自分が感じたこと、考えたことを話し合う学習プログラムがたくさん開発されています。

話を聞くだけでなく、五感を使って体験し、その体験を通して自分自身が内発的に感じ、考える。そこで感じたことを、他の人と話し合う。そのような活動が、環境問題や貧困の問題を遠い世界で起こっていることではなく、自分にも関係のある大切なこととしてとらえる機会になるのです。

## (2) 解決方法をみんなで探究する、地域の未来をみんなで描く

ESDは、一人ではなく、異なった価値観や意見を持つ人たちと共同で解決方法を探究しようとする進め方が大切です。そのような活動を通して、人には多様な考え方があることを理解するでしょう。また異なる意見を持った人たちの理解を

得るための方法を学ぶこともあるでしょう。さらに発展して、解決方法を得るためにはどのような知識や能力を持った人が必要なかを考え、そのような人を巻き込む方法についても身につけることにつながります。



### 専門的な知識

解決方法の探究にはさまざまな専門的な知識が必要となります。例えば、「里山の保全」という課題でESDに取り組む場合、その地で暮らす住民や農林業の従事者はもちろん、環境学や生物学、林学、社会学などの専門家、流通や住宅メーカーなどの事業者、行政機関の人、また高齢者の暮らしを考えると福祉関係者の知識やノウハウも必要となるでしょう。このような専門的な知識を持つ人に、どのような立場やタイミングで参画してもらうのが効果的か、学びの場を計画的にデザインすることが重要です。

また、同じ専門家でも意見が異なることもあります。さまざまな意見を参考に、自分たちの意見を形成していくことも大切なアプローチと言えます。

## (3) 仮説を立てる

持続可能な未来のための解決方法に正解はありません。しかし、具体的な解決方法を共に考え、出てきた方法を単なる思いつきで終わらせないために、それを実行した場合の効果や、それに伴うリスク、必要な経費や人員、その他のさまざまな条件などを整理して、現実的なプランにしていかなければなりません。このようなプランの立案は、大人はもちろんですが、子どもであってもきちんとデザインして取り組めば十分可能なのです。

実際に、小学生たちが話し合って公園の利用方法など地域の自治について自治体へ提案をするケースは少なくありません。

この「アイデアだけで終わらずに、具体的な取り組みへと進めていくこと」はとても大切です。その過程の中で、ESD的な論理的な思考や社会を変えるためのアプローチ方法の一つひとつを学んでいくからです。

## (4) 実行し、継続した取り組みとする

よりよい将来のためにみんなで解決方法を考え、行動するところに、ESDの未来志向性があります。立案したプランを、実際に行動に移しましょう。実行に移すことで、さまざまな困難や想定外のこともたくさん起こります。学習者は実行をしながら、試行錯誤を繰り返し、そこから新たな課題を発見します。

このような取り組みは、まさに持続可能な社会を目指す取り組みであると共に、学習者に自分たちは社会を構成する一員だという自覚を芽生えさせ、自分たちの行動が社会を変えることにつながるという、主体的な市民意識を育てるでしょう。

ESD的な学びは、一度の取り組みで終わってしまうものではありません。この



ような学習と実践のサイクルを、継続的に進めることがとても大切です。よりよい未来をつくるために、多くの人たちの力を推進力として、継続していきましょう。



### ESDに取り組む始めの一步

現在ある教育や市民活動において、ESD的な概念を活かすためには、どうしたらよいのでしょうか？ここではそのアプローチ方法について整理をしました。

#### (1) 地域とのつながりを強化する

学校の学習活動や、公民館の連続講座、自然体験活動など、ESDにつながる学習の場において、地域のさまざまな主体者を巻き込み、地域の持続不可能な問題をテーマに、学び合いの場をつくることはとても有意義です。

##### ●地域の課題や未来像を共有する

地域のさまざまな主体者が集まり、地域の課題について考える、また地域の未来像をみんなで具体的にしていくことは、ESDを進める上でとても重要なアプローチです。現在の学びの場を地域の学びの場として、広げていきましょう。

##### ●多様な人びとと一緒にいる

今までの学習の場に、専門的な知識を持った人や、地域の農林漁業者、企業の人、多様な学習テーマを扱う教育の担い手の人たちを巻き込み、多様な価値観や知識を持ち寄って地域の課題を考えてみましょう。また地域で取り組む市民活動などでも、環境、福祉や子育て、子どもの問題、食の問題など、それぞれの団体が個別に活動をしています。これらの組織が、ESDという概念の下に集い、つながることはとても価値のあることだと思います。お互いのノウハウを活かすことは、よりよい地域づくりへとつながるでしょう。

#### (2) 学びのスタイルを変革する

今までの教育や活動の方法が、もし一方的な知識の教授になっていたり、また決まった内容の活動を繰り返すものであった場合、一度その方法自体を見直してみることも大切です。

##### ●参加体験型・問題解決型の手法を導入する

ESDは、一方的な知識伝達だけでなく、暮らしや地域に実際にある課題を題材に、未来志向の問題解決型学習を進めていくことが重要であると述べました。そこで、ワークショップ（ゲームなどの疑似体験、グループ討議、提案づくりなどを通して、参加者が主体的に学ぶ場をつくる）やフィールドワーク（まち探検、暮らしの点検、インタビューなどを通して、現実の面白さ、大変さ、複雑さに向き合い、よりよい暮らしや社会づくりにつなげて学習を進めていく）などの手法を取り入れてみましょう。このとき、前項で挙げたモデルのように、体験だけで終わらせない学びのデザインが大切です。

また、活動内容がマンネリ化していると感じている場合は、学習者が本当に「何かしたい」と思っている課題は何なのか、立ち戻ってみることも有効でしょう。

●多様なテーマへ展開し総合的に取り組む  
多様なテーマに展開・統合化するためには、あれもこれもと最初から盛り込むのではなく、身近な疑問や興味・要求などから始め、地域の課題とその原因をひもとくことが大切です。また、どのようなテーマでも、今までなかなか活動に参加できなかった、企業で働く人たちははじめ、外国人や障がい者、子育て中の女性、高齢者といった人々も共に学ぶことにより、地域の課題が多面的に見えてくるでしょう。

##### ●継続的な取り組みとする

単発の体験学習では、ESDで育みたい価値観の変化や、行動の変化を求めることは難しいでしょう。長期的な視点に立った学びの場を設計し、計画を立てることはとても重要です。もちろん、学校の授業や、社会教育施設や民間の体験型の学習施設などでは、さまざまな制約もあるでしょう。しかし、工夫次第で継続的な取り組みはきっと実現できるはずで、今までの取り組みの型にはまらず、もう一度継続的な取り組みという視点で、学習の場を見直してみてください。

### (3) 国際的な視点を盛り込む

持続可能な社会づくりにおいて、地球規模の課題や途上国の問題は深刻です。しかし、身近な問題だけに取り組んでいるとそのことを忘れがちです。だからこそ、取り組みに国際的な視点を盛り込むことには重要な意味があるのです。

#### ●国際的な課題に取り組む組織とつながる

国際的な取り組みをしている組織とつながり、お互いの教育や活動で連携することは、それぞれの活動を広げるだけでなく、今までの取り組みの意味を見直すきっかけにもなります。お互いの活動に関係がないと決めてしまわず、まずは教育の担い手同士がつながり、お互いの活動内容やその方法を情報交換することで、見えてくるものも多くあります。



#### ●外国の留学生や日本で暮らす外国人を活動に誘う

今までの取り組みに、外国から日本に来ている留学生や日本で暮らす外国人を誘い、一緒に活動することもアプローチ方法の一つです。共に活動する中で、自分たちとは異なった価値観や現実に触れ、今まで見えてこなかった課題が見えてくることがあります。また活動に参加した外国人も、そこで培った学びや経験を自分の国に持ち帰り、海外の課題解決に取り組むことも考えられます。地域の多様な人々を取り組みに巻き込むときに、ぜひ考えてみて下さい。

## 3 すでにスタートしている ESDの取り組み

### ESDの10年というキャンペーン

このESDという取り組みは国内外のさまざまな場所ですでに始まっています。

1章で紹介したように、発端は2002年のヨハネスブルグサミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）において、日本政府がNGOとともに行った提案です。そして、国連総会において2005年～2014年の10年を「持続可能な開発のための教育の10年」として、世界中でESDに取り組むことが決議されました。

そして2005年8月、先導機関であるユネスコが「ESDの10年国際実施計画」を定め、それを受ける形で2006年3月、日本の政府も「我が国におけるESDの10年実施計画」を発表しました。

そして、国内のさまざまな組織がみずからの活動においてESDの意味を考えはじめ、徐々にESDという概念の下に組織同士の連携が始まっています。またESDというキーワードで、地域の人たちが集い、地域の未来を考え、具体的な行動を起こそうとしている、そんな地域が次第に増えています。

しかし、ESDの本格的な取り組みはまさにこれからです。ESDに関わるすべての人たちと、協働で活動を広げたいと考えています。

この10年という期間で、何をどの程度まで実現するのか？具体的な達成目標はまだ明確に決まっていません。しかし、ESDが継続的に行われるためには、それを実行するしくみづくりがとて重要であると考えています。それは、行政と地域住民が協力しながら、地域全体で学びの場を築いていくという基本的な体制であったり、コーディネーターを含めた教育の担い手が有給で働けることであったり、もう少し組織的な、産官学民が一体となったESDサポートセンターのような支援組織であったりするでしょう。そのようなしくみづくりにおいても、その具体的な機能やあり方の検討が始まっています。



ESD-Jキックオフミーティング

## 元気な地域と人を育てましょう

ESDという学びは、地域のコミュニティを豊かにし、人と地域を元気にする取り組みです。

さまざまな人が集い、地域や地球の未来のために学び、行動するESDという活動は、大人であっても、子どもであっても、立場や年齢に関係なく、大きな達成感があり、感動があります。自分たちの住んでいる地域や地球がかけがえのないものと感じるようになるでしょう。人や自然にとってもやさしい気持ちになります。そして、地域がとても元気になります。

持続可能な開発のための教育の10年は、まだ始まったばかりです。以上のような特色を持つESDの学びを、皆さんの得意な分野と方法で、ぜひこれから一緒につくっていきましょう。



## 第3章 学びの場のデザイン

地域と人の数だけ、学びの方法はある  
しかし、人を変える豊かな学びに共通するもの  
それは担い手の強い思いと学びの場のデザイン力である



# 学校と地域のつながりが育む、 伝統という学び

福岡・立花町立上辺春小学校(みそこし応援団)

## サマリー

福岡・立花町立上辺春小学校では、農家のお母さんたちを中心とした学校応援組織「みそこし応援団」が結成されています。学校からの要請に応じて地域の人々がバラバラに来る「ゲストティーチャー」ではなく、地域の人たち自身がつながりをつくり、学校へ直接的に関わる組織です。地域特産の竹や梅、コンニャク料理などの授業を通し、子どもたちは地域の自然を活かすお母さんたちの技に驚き、大人たちも今まで気づけなかった当たり前の暮らしの豊かさに気づいていきます。

## 地域の課題

熊本との県境に位置する立花町は、タケノコや梅、ミカン、キウイなどの産地です。産地の家々では、一時に大量に生産される収穫物や副産物をあの手この手で加工し、一年間利用していくための工夫が姑から嫁へ、親から子へと受け継がれてきました。しかし、その暮らし方としての価値、教育的効果などは意識されず、働き盛りの親世代への継承が困難になっている今、地域の食文化は高齢化の波にさらわれて消えてしまいかねない状況にありました。



## 始めの一步

「みそこし」とは、食べ物を「みつける」、作物を「そだてる」、調理加工して「こしらえる」、ありがたく「しよくする」の頭文字をとったもので、地域の人びとに総合的な学習の意味をわかりやすく伝え、楽しく関わってもらうためのキャッチフレーズとして、前校長の石本勉先生が名づけました。

結成のきっかけは、2002年当時、上辺春小学校が八女郡学校給食会の研究指定を受けていたことでした。給食の研究事業というと、食事の準備や後片づけ、栄養指導などに力を入れるのが一般的ですが、「それで本質的な食生活改善に結びつくのだろうか?」「まとめの研究紀要では、決まって『家庭・地域との連携が課題』と書かれる。それなら、最初から本気で家庭・地域と連携した食育を実践しよう」と学校側は考えました。

そして石本先生は、学校だよりや回覧板を使って、「みそこし応援団募集」の案内を全戸へ何度もしつこく配り続けました。「よーわからんけど、子どもたちが何べんもチラシを持ってきてくれる。学校もなごう行かんけん、ご近所さんといっしょに行ってみようか」。石本先生の熱意に、地域の人たちが応えたのです。

## みそこしサミット開催

5月下旬、20人の方が集まり「第1回みそこし会議」が開催されました。石本先生は、「自分のやってきたことを子どもたちに教えてください」と参加者に言いました。「得意な分野はありませんか? 野菜づくり、料理、昔ながらの食べ物。何かありますか?」。鬼のてこぼし、竹ごはん、弁財天コンニャク……と思いついた言葉に、「そう!それを教えてやってください」。みそこし応援団の中村和代さんはそのときの様子を振り返ります。

「その気にさせられたというか、動かざるを得ないように話術で引っかかったようなもんです」。

参加者の賛同を得て、5月末には「第1回みそこしサミット」を開催することとなりました。応援団による家庭料理が体育館に並べられ、つくり方やその背景が、子どもや教師へと語られました。

この「みそこしサミット」にて、松尾地区にしかできない「弁財天コンニャク」、この地域が発祥といわれる「鬼のてこぼし」など、上辺春の食文化が子どもたちの前に立ち現われました。「私たちも梅を使ったオリジナル料理をつくりたい」「弁財天コンニャクをつくって、おいしさの秘密を探りたい」など、郷土食についての学習課題が具体化したのです。

そして、数人の教師で一年間の学習計画を一気につくり、各学年がそれぞれの分野の応援団員の方たちと共に学習を重ねていくことになりました。



### ゲストティーチャーでは不十分

一方、応援団のメンバーも、毎週のように会合を持ちました。『鬼のてこぼし』は上辺春が発祥と聞かすが、どげんふうに始まったか調べてみようか」「竹は何種類植えとったと？ モウソウ、マダケ、ハチク、シラタケ……。2月から6月まで順々にタケノコが出てくるようになってるばい」と、自身の暮らしを見つめ直す作業を重ねていきました。

11月の研究発表会（「第3回みそこしサミット」）では、子どもたちの発表の他、応援団による「みそこし食堂」を開店し、200名にのぼる教員や栄養士、教育関係者をして「こげんぜいたくなものは初めて食べた」と言わしめたといいます。

石本先生は言います。「近ごろ学校では、『人材活用』や『ゲストティーチャー』と



称して地域の方に授業をしてもらう機会が増えましたが、学校からの依頼で地域の人バラバラに来るだけでは不十分と感ずります。学校と地域先生の関係だけでなく、地域の人たち自身のつながりをつくることに、『応援団』の大きな意味があると考えます。そこに、ふるさとの子どもを育てる気風が生まれます。数年で職員が異動する学校だけでは、明らかに限界があるのです。

もちろん、地域の人びとにとってもこの取り組みの意味は大きいものでした。「ふだん何気なくつくっていたものの豊かさに気づかされた。それを孫の世代に伝えるという新しい役割を見つけて、これからの地域がいとおしくなった」と応援団のメンバーは語ります。4年たった今では、わからないことがあれば応援団がコーディネートして、先生たちの要望に合う人材をすぐに見つけてくれる、新しく赴任してきた先生にとっても、頼もしい存在となっています。

#### 関わった人たち

- 立花町立上辺春小学校
- 上辺春小学校PTA
- みそこし応援団



### 関わった人たちの変化

石本先生の後任の栗原校長が上辺春へ赴任して、「給食にしても、学校生活にしても、すごく落ち着いている」という感想を述べていました。みそこし応援団との交流を通して、食べ物をつくる技術だけでなく、子どもたちが食べ物や生活に向き合う姿勢みたいなものも学んでいるからでしょう。また、子どもたちが地域の大人と関わることで、「一人じゃない」という安心感、安心できる場所が生まれる、という効果も大きいようです。

さらに、家庭でも、親が子どもに教える関係から、子が親に教える関係も出てきたという点を石本先生は強調していました。学校で学んだ「地域の食」は、必



ずと言っていいくらい家庭の食卓の場でも話題になります。竹や梅の産地なのに、子どもから聞いた食べ物をまったく知らなかった、という親がたくさんいたのです。

なお、「みそこし応援団」自身も、地域おこしの実行部隊として、町の「地域振興会議」の一員となり、その活躍の場を広げています。

#### 関わった人たちの声

##### ●みそこし応援団 中村和代さん 中村ヨシ子さん



月に4～5回集まって勉強会を開きました。石本先生や大学の先生、外部の人のいろいろな話を聞いて、当たり前だった暮らしの中によさがあったことに気づかされました。私たちだけで結成したのではムリ。問いかけられることで、それこそ川の中に石を投げたかのように、これならどうか、こんなものもあるが……と広がっていったんです。すると、子どもたちにそのよさをつないでいきたい、と思うようになりました。



はじめての梅仕事に取り組む子どもたちは、教えていることを何一つ聞き漏らすまいと一生懸命ですよ。実習前に、授業でも梅のことを勉強しているようなんですが、実際に作業をやってみると、次々に「なぜ」「どうして」が出てくるんですね。だから、私たちが質問に答えられるように勉強しとかなないと（笑）。自分たちのしてきたことしか、話はでけんですけどね。60年近くこの土地に住み、身につけてきたことや親に習ったことはなんでも教えようと思っています。

##### みそこし応援団

上辺春小学校の総合的な学習の時間をサポートする地域の人たちの集まり。

●上辺春小学校 TEL：0943-36-0200

# 浜松に生きる日系ブラジル人・ペルー人高校生による ミューラル・プロジェクト

NPO法人 浜松NPOネットワークセンター (N-Pocket)

## サマリー

ミューラルとは、コミュニティの「困難」「問題」や「希望」「誇り」などのメッセージを込めて、地域の人びとと共に公共空間に絵を描く、市民による表現芸術のことです。9人の日系ブラジル人・ペルー人高校生たちが、困難を克服して学ぶ外国人高校生の存在を、同じ境遇の子どもたちや浜松の市民に伝えようと巨大な壁画づくりに取り組み、多文化共生のまちづくりに大きな一歩を踏み出しました。



## 移住労働者の子どもたちが抱える課題

静岡県浜松市の人口は60万人、その約4%、2万3千人が外国人移住労働者とその家族です（注：この数字は2005年4月の旧・浜松市のもの）。その8割が日系ブラジル人と日系ペルー人です。

今の日本の制度では、外国籍の子どもは義務教育の対象とはならないこともあり、不就学の児童が浜松市内だけで相当数いると推計されています。彼らは学校に通うためのお金がなかったり、言葉が壁となって授業についていけなかったり、さまざまな理由で勉強を継続できず中学校でドロップアウトするなど、高校への進学率は極めて低いのが現状です。結果として工場労働者の職を得ること

外に、将来の夢を広げるチャンスが奪われているのです。

「このままでは貧困の再生産を繰り返すだけ。外国人も勉強すれば将来が開けるのだと、壁に悩む子どもたちを励ます“当事者のロールモデル”が必要だ」。浜松NPOネットワークセンター（通称N-Pocket）の代表、山口祐子さんはそう考えていました。

## ミューラル・プロジェクトとの出会い

山口さんは米国のNPOとの交流事業を通じて、チャイナタウンなどのマイノリティの問題に取り組む「ミューラル」という交流手法に出会いました。

ミューラルは、地域の歴史や文化、課

題や思いを共有し、人びとを勇気づけ、かづけていく手段として中南米や米国各地に広がっています。「言葉ではなく絵を使ったコミュニケーション、アートが持つポジティブな力は、多文化共生のテーマにこそふさわしい!」。山口さんはそう直感し、浜松に暮らす日系ブラジル人・ペルー人の高校生たちと、このミューラルを突破口にして、若者のリーダーを育てようとプロジェクトを起こしました。

そして、市内の高校を一軒一軒訪問し、校長先生の理解を得ることから始め、日系ブラジル人・ペルー人高校生の参加者を集めました。さらに、県立浜松江之島高校の美術の先生と美術部部員の協力を得て、この活動は2003年春にスタートしました。忙しい高校の先生方に趣旨を理解していただき協力を得るには、とにかく訪問してしっかり説明するという正攻法でした。

## 壁画の作成プロセスが コミュニケーションの場に

集まった高校生たちがまず受けたのは表現トレーニングで、導入として「演劇ワークショップ」を2回実施しました。体を動かしたり、「将来の夢」という絵を貼り紙で創作したり、「仲良くなること」「表現すること」を体験しました。これによって、最初に「ミューラルってよくわからないけど、行けば仲間がいて楽しい」というよいイメージが定着したようです。

次のステップでは、それぞれのライフヒストリーを調査し直してお互いに交換



## 関わった人たち

- 参加した日系南米人の高校生たち（ミューラルの主人公）
- N-Pocket（ミューラルの企画・コーディネーター）
- 日米コミュニティエクステンジ、日本財団、静岡県国際交流協会（助成）
- American Friends Service Committee (AFSC)（協働団体、米国のNGO）
- ミューラル・アーティスト ケンダル・オウ氏（注：AFSCのスタッフ）
- 県立浜松江之島高校 美術科主任 鈴木先生（美術の専門家として）
- 同美術部部員（美術を学ぶ同世代のサポーターとして）
- 静岡文化芸術大学（コミュニティ・ペインティング・デイの場、作品発表の場を提供）
- べんてる他、画材提供企業5社
- その他、コミュニティ・ペインティング・デイ参加者、作品展示に協力した方々など



しました。どうやって日本に来て、どんな困難があったか、それをどう克服したか、これからの夢や進路の希望についてなど、絵に盛り込む共通のメッセージをまとめていきました。

夏にはサンフランシスコを訪れ、商店街や小学校の壁に描かれたミューラルを見学、ミューラル・アーティストのケンダル・オウさんから制作方法や表現方法などを学びました。表現したいことをポーズで表し、写真を撮って絵のモチーフにし、壁画全体の下絵をつくっていきます。下絵づくりの作業からは日本人の美術専攻科の生徒たちも大活躍でした。

ミニチュアの壁画が完成したら、次は高さ3m・幅11mの板に拡大して描画、そしてペインティング。巨大な壁画に使う画材は、外国人生徒たちで「こういうメッセージを絵に描くので、画材をください」と寄せ書きした手紙を企業に送り、5社から協賛を得たそうです。

また、静岡文化芸術大学と浜松江之島高校で3日間、コミュニティ・ペインティ

ング・デイを開催、子どもから大人まで、延べ160名の人が壁画のペインティングに参加しました。中には外国人の不登校の子どもの姿もありました。

いろいろな人が「一緒に色を塗る」という時間は、さまざまなコミュニケーションを生み出します。多くの人が、日系の高校生たちとはじめて話し、その境遇を知り、彼らが抱えている悩みや希望に気づくことができました。

そしてようやく完成。祖国での、家族との思い出に始まり、乗り越えた困難と、彼らの希望＝「あきらめないで」「今が学ぶとき」「あなたは一人じゃない」「夢に向かって」というメッセージが見事に表現されました。

作品は静岡文化芸術大学の学園祭や浜松駅前、そして国体イベントの背景としても活躍し国立民族学博物館にも展示され、多くの浜松市民の目に彼らのメッセージは焼きついたことでしょう。



## ミューラル・プロジェクトから生まれたもの

ミューラルは参加した学生たちに“リーダーとしての自覚”と“共に行動を起こす仲間”をもたらしました。

山城口ベルトさんは現在大学生。このプロジェクトの参加者4名と共に外国籍の高校生や学生たちのサークル“AJLAN”（日系南米わかもの協会）を立ち上げました。「母国語教室をやりたい」「進学相談会をやりたい」など具体的なアイデアを、N-Pocketのサポートを得て一つずつ実現しつつあります。

例えば、外国人の子どもと保護者のた

めの高校進学ガイダンスの開催。「学ぶことは未来のために」、そんなメッセージが徐々に伝わり、ガイダンスの参加者は3年間で300名を超えました。

一方、3カ月間彼らと絵画づくりの時間を共にした美術科の高校生たちは、同世代の抱えている困難を理解しながら絵に表現していくという経験を通し、お互いを尊重しながら意見を出し合うこと、深く議論することができるようになったと言います。また視野が広がり、何名かは映像や伝統文化の分野に進むことを決めたようです。

### 関わった人たちの声

#### ●山城口ベルトさん

(浜松大学 国際経済学部)  
私たちはたくさんの人の力でミューラルという体験ができました。私も周りの人を助けられるようになりました。



私たちと同じ困難を繰り返さないために、私たちが始めなくては、と思っています。

#### ●県立浜松江之島高校 美術部の生徒

浜松には外国人がたくさんいますが、ふだん接する機会が少ないので、どうして彼らが浜松にいるのか、どんなことを感じ、考えているのか、よくわかりませんでした。ミューラルに関わってそれを知ることができました。また、言葉の壁など多くの困難を乗り越えて、前向きにがんばっている彼らの思いを知って、かえって自分が励まされました。

#### ●県立浜松江之島高校 美術科主任 鈴木先生

多くの時間を割く必要があり学校の枠を崩さないといけないこと、海外の手法が日本でも成功するかどうか実験的な取り組みであったことから、引き受けるまで一週間悩みました。でも生半可な関わりではできないことをやり遂げた生徒たちの成長を見て、挑戦の大切さを学びました。学校としてどう取り組んでいくかはまだまだ未消化ですが、今度同様の呼びかけがあったら、また引き受けたいと思います。

#### N-Pocket (NPO法人 浜松NPOネットワークセンター)

地域が抱える課題を、当事者（子ども・障がいのある人・在住外国人・高齢者など）と共に事業化して、多様な市民が参加できる活動スタイルを展開するNPO。

●<http://www.n-pocket.jp/>



# 地域に学び 地域に還す

## 富山高専学生・学校・地域の学びの連鎖

富山工業高等専門学校

### サマリー

富山工業高等専門学校では、「専攻科特別演習授業、通称PBL (Problem-Based Learning)」という、とても興味深い授業が行われています。この授業のコンセプトは「地域に役立つ・ひとに優しいものづくり」。19名の学生が地域と関わりながら、実に生き生きとものづくりをしています。

### 学校だけでは十分に学べない

日々新聞記事を賑わしている科学技術に関する深刻な事故や事件。「富山高専卒の技術者にはそうなってほしくない。そのためには何が重要なんだろうか？学校の授業だけでは十分じゃない。地域に求められるものづくりを、地域の人たちと話し、その学び合うプロセスを授業にすることができないだろうか？」。担当教員らは自身の問題意識を伝え合い、これからの技術者に必要な学びを創造し始めました。「技術者には、活きた知恵を技術にする創造性と、その過程でのコミュニケーション力が絶対に必要だ」。

そんな担当教員らの熱い思いから、この授業は始まりました。

### 学生・学校の社会化

担当教員は、コミュニケーションの苦手な技術系の学生に、いきなり参加型授業・ワークショップは難しいと考え、まず学生への問かけから始めました。「地域の人たちが困っていることは何だろう？自分たちの技術力でできることはないだろうか？」。これまで考えたこともなかった問かけに、学生たちは戸惑いました。しかし、じっくり彼らに話しかけ、地域の人との出会いの場を設け、地域の人びとの熱い志に触れてもらううちに、自分たちの存在価値を見出したのです。「自分たちの技術や学んだことが、誰かに役立つかもしれない」。学生のまなざしは変わり、学びの欲求が高まり始めました。

### 関わった人たち

- 富山工業高等専門学校 専攻科一年の学生 19名
- ・機械工学科 教授 本江哲行さん
- ・技術部 副技術長 伊藤通子さん
- あそあそ自然学校
- 秋浦保育園
- NPO法人ディサービスセンター おらとこ
- 土遊野農場

今年で3年目となるこの授業は年々進化しています。1年目は迷いながら進めたこともあり、ものづくりまでたどり着けませんでした。その反省と課題を踏まえながら、担当教員らは新しい教授法を

開発していきました。「先行きや効果が不確実なものもあるが、活動のほとんどを学生の自主性に任せている。教員らは学びのファシリテーターと、地域社会とのコーディネーターに徹している。この授

### 技術者のタマゴがつくった6つの道具 (2006年8月現在 未成品を含む)

#### ●知育おもちゃ〈協働開発先 萩浦保育園〉(2005年度製作)



園長さんと保育士さんのアドバイスを受け、子どもたちを観察し、子どもの発達に応じて遊べる知育おもちゃをつくりました。子どもにやさしい塗料や木材にこだわり、1) 園周辺の地理を学ぶ 2) パーツの溝をつなぐとビー玉がころがる 3) 数字合わせができる という一粒で3度おいしい木製パズルは子どもたちに大人気!

#### ●田で働くメカアイガモ〈協働開発先 土遊野農場〉



土遊野農場は、地域循環型農業を実践し、米づくりはアイガモ農法を取り入れています。しかし、アイガモ農法にはコストや手間がかかるため、アイガモの働きをするロボットをつくることにしました。アイガモは足ひれで水田の土を攪拌し、酸素を供給したり、雑草が生えないようにします。

#### ●エネルギー学習教材ー圧縮型発火装置〈協働開発先 あそあそ自然学校〉



あそあそ自然学校ではエネルギー教育をしたいと思っていることがわかり、火の起こし方でマッチに代わるよいものがあれば…と考えました。そこで「発火装置」をつくることに。火という文明のありがたさと物質エネルギーの原理を子どもたちに伝える道具でもあります。

#### ●自然エネルギー(水力)を利用した発電装置〈協働開発先 土遊野農場〉



土遊野農場は、地産地消や自給自足の生き方を提案し実践している農場です。しかし、今のところ電力だけは電力会社から買っています。「自然エネルギーを使って少しでも石油への依存を減らしたい」。そんな夢を伺い、農場を調査。安定した水流を発見。小水力発電装置にチャレンジすることにしました。

#### ●リハビリ用「頭のプロテイン」〈協働開発先 おらとこ〉

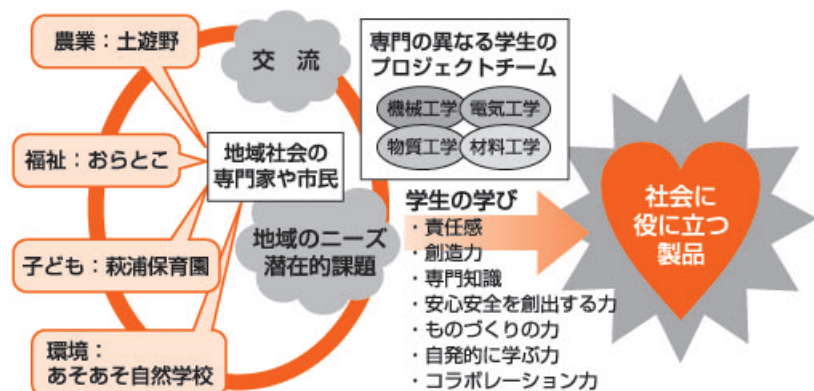


おらとこは、子どもからお年寄り、障がいのある人ない人、いろいろな人が訪れるディサービス施設で、まちづくりの拠点でもあります。誰もが参加できる遊び道具、脳の活性化や指先の運動につながるように視覚や聴覚に刺激のあるもの、みずからの判断が必要になるおもちゃを考えました。

業は、学生と我々教員との信頼関係で成り立っている」。そして、うまくいかない部分に真剣に向き合い「なんとかしよう」としている学生の姿に、技術者としての責任感の芽生えと学びへの意欲を感じました。

従来の知識詰め込み型の教育スタイル

から、参加型・地域連携型に方向変換させていくことはそうそう容易ではありません。しかし、学生の変化や地域の人たちの評価によって、この授業の担当教員らは自信をつけていきました。地域密着型の、まさにESD的学びが富山県にて実践されていったのです。



### 関わった人たちの変化

学生は明らかに変わったと言います。授業を、学びを楽しみ、そして学びに対しての貪欲さが生じていました。知らないことを知ろうとする意識、果敢にチャレンジする行動力、たどたどしいけれど

も伝えたいという思いが込められた言葉の力がひしひしと伝播してきました。学生、教員、地域の人たちの距離感が縮まり、その学びの連鎖が、少しずつ地域に変化をもたらしています。

#### 富山工業高等専門学校

実践的かつ創造的技術者の育成を目指し、産学の共同研究や企業技術者の育成支援など地域貢献にも力を注ぐ高等専門学校。

● <http://www.toyama-nct.ac.jp/>

### 関わった人たちの声

#### ● 学生の皆さん

今までは受身の授業ばかりで学ぶことが面白いとなかなか思えなかったけど、この授業は自分たちの興味で進め方などを決めることができるし、地域の人たちの話を聞くと視野が広がるのでやる気になります。「役に立っている」という実感があるし、ものをつくっていても、相手の顔が見えるので何とかよいものを…と思います。チーム内で意見の食い違いなどもあるけれど、何とか調整して進めています。話すことが苦手だったけどその大切さにも気づきました。



#### ● 富山工業高等専門学校 教授 本江哲行さん

地域社会をリードするNPOの思いや、出会った人一人ひとりのニーズに合わせてものを創ることで、これまで自覚に乏しかった学生が、「自分も社会をつくっている一人なんだ!」という実感を持ち始めているようです。学校という閉じた場を飛び出し、社会と接して人びとの生きた知恵を形にしていくこと、そのプロセスにおけるコミュニケーションが、学生をしっかり成長させていると感じています。一番大変なのは、最初の授業で学生のモチベーションを上げていくファシリテーション。与えられることに慣れている学生の、自分の心と頭で考える自発性を引き出す作業は面白くもあり、ちょっと大変です。



#### ● 萩浦保育園 島田茂さん (社会福祉法人富山YMCA福祉社会理事長)

学生との触れ合いは、ふだん私たち大人が気づかないことに気づかせてくれ、その自由な発想から世界に一つ、ここにしかないものをつくってくれていることを本当にうれしく思っています。子どもたちの心を理解しようと努力し、いろいろな人の意見を聞きながらつくってくれるそのプロセスがとてもいい。だからこそ、子どもたちも大事に愛着を持っておもちゃに触れています。私自身も学生から刺激をもらっています。



#### ● NPO法人ディサービスセンター おらとこ 理事長 野入美津恵さん

異年齢の人たち、いろいろな人たちが楽しめるもの、不自由さを超越するもの、色・形・遊び方の工夫ができるもの、というリクエストを学生さんにしました。学生さんからは、「こんなふうを考えました!」という提案をもらい、またみんなで「あーでもないこーでもない、もっとこういうふうがいい」といって試作品ができてきています。答えを見つけるまでの多様な考え方や関わり方、教科書にはない、一つの答えにこだわらないそのプロセスを楽しみながら学び合い、育ち合っています。



# 放置自転車で平和構築 松山の「銃を鋤へ」プロジェクト

NPO法人 えひめグローバルネットワーク(松山市)

## サマリー

2000年から、松山市内の放置自転車をアフリカ南東部のモザンビーク共和国に送り、自転車との交換によって武器を回収し、平和構築を進めるという、ダイナミックなESD活動を展開しています。日本の大量生産・大量消費・大量放棄の問題やリサイクルの推進、国際理解、平和など多様な視点を持ち、しかも「地球規模で考え、地域で動く」というESDのモットーを実感できるプロジェクトで、急がれるわが国のプログラム開発に大きなヒントを与えてくれると思います。

## 活動の背景

1998年4月から国際協力活動の立ち上げに向けた勉強会を開いて仲間を集め、7月、えひめグローバルネットを設立しました。勉強会で議論した文献資料の中で、日本とモザンビークのNGOが連携してすでに始めていた「銃を鋤へプロジェクト」と出会ったのです。約30年続いた独立戦争・内戦でモザンビーク国内に蔓延した武器を、農具や自転車、ミシンと

交換して回収し、国民の経済的自立を促す試みで、足下の松山市には、廃棄処分される放置自転車だけで年間3千台を超えるという問題も見えてきました。

## 始めの一步

はじめて100台の自転車を送ったのは2000年1月。組織発足後、まもなく、自転車集めの模索が始まりました。放置自転車の撤去やリサイクルを行う松山市役

## 関わった人たち

- 松山市役所総合交通課
  - 松山市シルバー人材センター
  - 愛媛信用金庫
  - 六時屋
  - 松山大学園祭実行委員会
  - 駐日モザンビーク大使館
  - NGOモザンビークキリスト教評議会
  - 松山市立さくら小学校・石井北小学校・野忽那小学校
  - 聖カタリナ女子高校
  - 県立松山工業高校
  - 県立新居浜工業高校
  - NPO・グリーン・カルチャー・イン・マツヤマ
  - 市民団体・パドック
  - オープンハンド
  - エコファクトリー
  - ネットワークグリーンアース うま
  - 松山市バドミントン協会
  - コープ自然派えひめ
  - 愛媛大学農学部
  - 久留米地球市民ボランティアの会
  - 募金箱設置協力店 (県内23店舗)
- ほか(中でも松山市役所との協働は不可欠で、ボランティアベースでも関わってもらっています)



所に「無償譲渡」を求める交渉は約3カ月続いたと言います。それまで業者への払い下げ、施設への無償譲渡が行われていましたが、海外に提供する「前例」がなかったのです。竹内よし子代表は、廃棄自転車の中に、使える状態にもかかわらず、デザインが古くて売れないなどの理由で廃棄に回されている一群を見つけ、「その自転車から有効活用を」と掛け合いました。「松山の放置自転車もモザンビークの銃もなくしましょう」と粘り強く話し合い、実現にこぎつけたのです。

## 具体的な取り組み内容

地元では「わくわく」さんと呼ばれています。みんながわくわく楽しくなる活動を目指し、通称になりました。現在、会員は100人あまり。道後温泉に近い木造平屋の借家が事務所です。松山大学、愛媛大学なども近く、いつも若者たちでにぎわっています。

モザンビークに送った自転車は、2000年に続き、2003年に200台、2006年に100台。「わくわくワールド」「わくわく

カフェ」など国際理解の学習会、チャリティイベントなどを行いながら、取り組んできました。

第3回自転車発送イベント(2006年3月26日)には、高校生や大学生、会社員、外国人ボランティアのほか、市役所職員や放置自転車の撤去・管理を請け負うシルバー人材センター職員ら総勢60人が参加しました。事前に工業高校の生徒らが整備した放置自転車はすでに松山港に運びこまれていましたが、集合場所は、港から10kmほど離れた小学校でした。市職員から、放置自転車の現状や安全な乗り方、整備の仕方などの説明を聞いたあと、参加者はそろって自転車に乗って港へ向かったのです。

ここに「日本の不要な自転車をモザンビークに送る活動に終わらせない」という決意を感じました。参加した一人ひとりに「松山市になぜ放置自転車が多いのか」を考えてほしい。自転車という乗り物を見直し、みずから大切に使うという意識を持ってもらいたい。そんな願い



が「チャリ・チャリティー」プログラムになっていました。

港ではスタッフがココナッツ・ミルク入りのモザンビーク・カレーで出迎えてくれました。お腹がいっぱいになったところで、作業です。まずは、ポルトガル語のメッセージ・ワッペン「松山から平和の願いをこめて」を手貼り。はがれないよう丁寧に丁寧に貼っていたのが印象に残りました。続いて、ベテランのボランティア数人が、コンテナに入り、参加者から手渡される自転車を1台1台器用に積み上げていきます。作業が終わると、全員で記念写真を撮り、寸劇も披露されました。内容は、モザンビークでの銃の回収作業です。すでに銃を自転車に交換した村人に説得してもらいながら続ける作業に、苦勞がしのばれました。

活動は多面的に広がっています。学校などでの国際理解講座や教師研修会への講師派遣の他、昨年からは、地元信用金庫、菓子店との連携で、回収した武器でつくったアート作品の展示や募金箱の設

置が実現しました。「送りっぱなしにしない」をモットーに、2000年と2004年にはスタッフが現地を視察しました。2回目には輸送途中に一部が盗まれる事件もあり、2005年には現地を調査し、3回目は、スタッフが現地での受け取りに立ち会うとともに、次なるプロジェクトとして農村部で持続可能なコミュニティ開発を進める事前調査を行いました。さらにうれしいことがありました。2006年10月7日、駐日モザンビーク大使館、在モザンビーク日本大使館の協力を得て、日本初のモザンビーク市民友好協会が松山市において設立されたのです。

### 関わった人たちの変化

松山市の放置自転車に「減少」という明確な数字はまだ見えていません。でも、市職員は「放置自転車はなくならないものと諦めていたが、わくわくさんに『なくしましょう』と呼びかけられて元気がわいた」と言い、シルバー人材センターの職員は「アフリカで役立つんですね、頑張って、と温かい声をかけてくれる人が増えてうれしい」と言います。発送を手伝った女子学生も「私も自転車をもっと大切にしなきゃ」と笑顔で語りました。変化は着実に起きているのです。今、グローバルネットの専属スタッフとして、元学生インターンが複数活躍しています。現在の学生インターンは9人。大学の講



義で竹内さんと出会い、飛び込んだ女子学生やモザンビークに関心を持つ女子学生、定期的に行う地域の川掃除に興味を持って参加した男子学生もいます。愛媛大学などと連携した講義「国際協力論」や研究活動も深まっています。パートナーシップを組む団体の変化はもちろですが、「わくわく」に集まる若い力からも目が離せません。



### 関わった人たちの声

●ゲイブ・フィリップスクレスさん  
(グローバルネット国際理解担当、25歳)



「チャリ・チャリティー」を考察しました。自転車は環境にも健康にもいい平和な乗り物です。これからも平和への願いと気持ちを込めて、自転車に乗っていきます。

●川原万実さん  
(愛媛大学2年、グローバルネットワークインターン)



知る、伝える、行動する。自転車の発送作業に参加して自分ができることがたくさんあることを見つけました。

●山下智史さん  
(松山市立湯築小学校6年、2006年から活動に参加)



自転車の積み込みを手伝って、これが恐ろしい武器と交換できると思うと、ちょっとすっきりした。でも、まだ使えるのにちょっと壊れただけで自転車を捨てている人が多くてもったいない。

●藤岡麻益さん  
(伊予農業高2年女子、自転車発送イベントに参加)  
この自転車がモザンビークで役立つのかと思うと、アフリカの平和問題を身近に感じられるようになりました。

●森本めぐみさん  
(大学生32歳、自転車発送イベントに参加)  
世界の紛争問題は自分からは遠かった。でも、イベントに参加して、銃が身近にあると人間らしい暮らしはできないと思ったし、平和になってほしいという気持ちを持てた。アフリカの平和問題をはじめて実感できたように思う。

### NPO法人 えひめグローバルネットワーク

「地球規模で考え、地域で活動し、みずから変わっていく」をモットーに、市民参加による国際協力活動を実践し、グローバル教育の普及、ネットワークの構築に取り組んでいる。

●<http://www.egn.or.jp/>

# 先人の「不屈の精神」と「住民自治」に学ぶ 震災復興に挑む山古志村

山古志共和国構想準備室事務局

## サマリー

中越大地震被災地の新潟県 旧山古志村 小松倉集落には、昭和初期に貧しい村人のツルハシだけで掘り抜かれた、日本一の手掘り隧道があります。子孫のためにと隧道を残してくれた先人に学び、今度は自分たちが次の世代へ「山古志」を残そうという意欲に燃えて、震災による絶望から立ち上がりつつある人びとがいます。そこには、日本の中山間地の問題を考え、取り組むために大切な、学びとエンパワーメントの鍵が見えます。

## 地域の課題

震災前の旧山古志村は、棚田が広がり日本の原風景とも言われる美しい山村で、牛の角突きや錦鯉の養殖など独特の文化や産業がありました。日本の多くの中山間地と同じく、過疎などの問題を抱えていました。

## 中山隧道と映画「掘るまいか」

中山隧道は、豪雪で陸の孤島となる村の住民を、50年もの間、死や病から救ってくれた命の道でもあります。昭和初期、行政への再三再四の陳情が聞き入れられ



ず、村人たちは「俺たちで隧道を掘ろう」と決心しました。そして、幾多の困難に負けず、16年の歳月を費やして掘り抜かれた中山隧道は922m（現在残っている

## 関わった人たち

- 小松倉集落の人びと
- 中山隧道保存会
- 中山隧道文化基金
- 中越大地震山古志復興映画基金
- 「掘るまいか」にいがた上映実行委員会
- 「山古志共和国」構想準備委員会
- 長岡市復興推進室

のは877m)。人が通ることができる手掘り隧道としては日本一の長さです。将来の村の幸せがこの手にかかっているのだという信念を胸に、当時の村人が一致団結した歴史は、人びとの誇りでした。その誇りは、平成10年に新しく完成した中山トンネルによって隧道が役割を終えた後も、「中山隧道を残したい」という熱意となって、保存運動へと展開していきました。

同時に、当時の村人の偉業を後世に伝えるため、記録映画「掘るまいか」を制作しようという動きも出てきました。映画づくりは、制作委員会形式で資金を集めることから始まり、全国の方々のさまざまな協力を得て行われました。また、旧山古志村に隧道文化基金を設け、企業、団体、一般市民からも広く募金を集めました。撮影は、中山隧道の中に当時の掘削場面を再現しながら行われました。そして、住民や中山隧道を残していきたいと願う人びとがみずから出演し、平成15年に完成しました。

## 壊滅的被害をもたらした大震災

その山古志を平成16年10月23日、中越大地震が襲いました。山は動き、道は崩れ、家はもちろん先祖伝来の棚田や畑は埋まり、養鯉池は割れて水脈が失われました。全住民が避難を余儀なくされ、失意のどん底に突き落とされました。そ



のときの様子を知る人は、異口同音に、「山古志はもうダメだと思った」と言います。しかし、今、人びとが傾いた家に少しずつ帰り始めています。ものは失ったが心（文化）は失っていないことに気づいた人々たちです。

「掘るまいか」にいがた上映実行委員長の市嶋彰さんは、最初は知り合いから頼まれて「掘るまいか」の上映会をしました。しかし、震災後、被災地ボランティアを経て、この映画の価値を再認識します。

「例えば、本当の自治というもの、コミュニティの力、人間の尊厳、子孫に文化を伝えていくことの意義と重要性、それらが山古志にあったのです。一人でも多くの人にそれを伝えたい」、そう考えるようになっていました。そして、震災から2年間、全国を奔走し、今までに100回以上のチャリティー上



映会を実現していったのです。

市嶋さんは、我々日本人が近代化のために、西欧的な文明を吸収し、置き去りにしてきた「日本の文化財産」こそ、「持続可能な地域」を保つ根底に流れるものだと思います。

### 関わった人たちの変化

やがて、関わった人たちの中に「山古志の応援団」をつくろうという機運が盛り上がっていきました。持続可能な地域として存在していた山古志を守り、長期的な支援やつながりの輪を広げるために、「山古志共和国」構想を実現しようとする計画です。それは、全国の山古志ファンを住民登録し、地域通貨による物産の売買や、文化遺産ツアー、村民との交流会など、支援のしくみづくりと学びの場づくりの計画として、平成19年4月の設立に向けて賛同者を募っています。

また、市嶋さんは映画を観た全国の人の声を村人へ届けます。「映画に悲壮感

なく、村民の方たちの誇りしげな笑顔や話す姿がよかった」「自信と誇りに満ちて、堂々と胸をはって生きている姿にまいった。こういう風にならねば」「涙が出た。人のエネルギーのすごさを感じた。この隧道は我々にとっても大きな財産。それを知り伝えることは私にもできることです」。これらの言葉は、村の人たちへ大きな勇気を与えています。

一方、行政サイドでも村人を支える人がいます。震災当時、旧山古志村役場で村長を支える震災処理の要にあつた青木

勝さん（長岡市復興推進室次長）は、山古志人でありながらも復興への視点は行政マンです。「日本全国の中山間地が元気を失っている、今の時代に震災を受けたことに意味がある。都市部の豊かさに山間部の暮らしのあり方が重要な役割を果たしてきたことに気づき、今、行動を起こさなければ日本の未来は来ない。ヤマの問題は都市の問題。日本に暮らす我々全員の問題なのです。私たちは、主体的な市民活動を応援しながら具体的な提言をしていきたいのです」。

そう語る青木さんは、震災後も信濃川の濁りが消えないことから、「山の暮らしを戻さなければ町の暮らしも成り立たな

い。今こそ皆で考えよう」と呼びかけています。復興の過程は、自分たちの暮らし方を真正面から考える学びのチャンスだととらえているのです。

中山隧道に象徴される、先人の不屈の

精神と住民自治の姿勢に学んだ多くの人びとが、村の復興に積極的に取り組み、さらには過疎の問題さえも解決しようと、確実に一歩ずつ前に進み始めています。

### 関わった人たちの声



#### ●中越大震災山古志復興映画基金代表 関正史さん

もう山古志は終わりかと思いましたが、決して便利とはいえない山に帰ろうとする私たち人間にとって豊かさとは何だろうかと考えました。震災に遭って、わかったことがあります。私たちは伝統文化を“もっている”のではない、伝統文化を次の世代へ継ぎながら“生かされている”のだと。そこから生きる力や、他の村人と共に前を向いて立ち向かう力をもらいました。



#### ●小松倉集落区長 小林さん（全国の映画を観た人たちの意見を前に）

24軒のうちやっと7軒が村に戻りました。集落は全滅で、私の田は2年経った今でもすべてが土砂の下です。でも、隧道に立つと、ご先祖さまへの感謝の気持ちと畏敬の念、同時にその一族であるという誇りしげや勇気が湧き上がってきます。新しく集落に住みたいという人や支援者などを村外から受け入れ、手を携えて村を残そうと話し合いを始めました。隧道から震災復興へと、“勇気”を次の世代へと受け継ぎたいと思うようになってきました。



#### ●長島サキさん（71歳）

震災で家業だった養鶏資材販売店を失いました。でも、復興のために日本中からたくさんボランティアさんや工事の方が来てくれるので、今年その方たちをお泊めする民宿を始めました。近くで採れる山菜や昔ながらの料理を、喜んで食べていただけるのがうれしいです。もっともっとたくさんの人たちに来てもらって、山古志のよいところを知ってもらおうのが、私の夢になりました。70歳から始めた民宿だけど、夢に向けて、楽しみながら、まだまだがんばりますよ。

#### 山古志共和国構想準備室事務局

「掘るまいか」にいがた上映実行委員長の新潟市の市嶋彰さんと、映画の製作スタッフらが、山古志村の「恒久的な支援を」と発案、平成19年4月の建国に向けて賛同者を募っている。

●映画「掘るまいか」や「山古志共和国構想」の関連ホームページ

<http://1000yamakoshi.main.jp/>





## おわりに

「ESDはわかりにくい!」、この言葉が本書を作成した一番の動機です。そのような声に応えるために、半年以上にわたり、執筆者と編集スタッフで構成や内容に関して検討し、試行錯誤をした結果やっとでき上がったのが本書です。読者の皆さんにとって包括的であり、また人によって多様なとらえ方ができる「ESD」について、少しでも理解が進み、もっと知りたい!自分でもやってみよう!という欲求につながれば大変うれしく思います。

しかし、本書がESDについてすべてを語っているとは思っていません。紙面の関係で割愛した内容やここで語りきれないこともいろいろとあります。また、ESDという取り組み自体もまだ始まったばかりです。これからもさまざまな価値観を持つ人たちで議論され、試行錯誤が繰り返されながら、ESDはどんどん魅力的に変化を遂げていくでしょう。読者の皆さんもぜひご自身の「ESD」観を創造し、そのような議論に加わってください。そして、地球の未来をつくる「人」を育てる取り組みを一緒に創っていきましょう。

今回の「基本編」では、あくまでも基本的な考え方を整理しました。今後は、担い手の皆さんが具体的な行動を起こすために必要な取り組みや方法、プログラム例などの情報を多く掲載した「実践編」や、実践の場によって異なる取り組み方を解説した「学校編」、「社会教育施設編」、「企業編」なども計画中です。ぜひ、本書をお読みいただいた感想などをお寄せいただき、今後のテキストブック企画に反映できればと思います。

最後に、本書を発行するに当たり、費用の一切を助成いただきましたPanasonic&EFF環境サポーターズ☆マッチング基金の関係者の皆さま、また事例掲載のために快く取材を受けていただきました各事業の実施者、並びにインタビューにお応えいただいた関係者の皆さま、多忙な中、原稿を執筆いただきました執筆者の皆さまに、心より深く感謝申し上げます。

## 出典一覧

### 「持続可能な未来のための学習」

著：ユネスコ  
監訳：阿部 治、野田 研一、鳥飼 玖美子  
出版社：立教大学出版会

### 「1秒の世界」

責任編集：山本良一  
編集：Think the Earth プロジェクト  
出版社：ダイヤモンド社

### 「私にできることは、なんだろう。」

編集：地球市民村  
出版社：アスコム

## 関連サイト

- 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 (ESD-J)  
[www.esd-j.org](http://www.esd-j.org)  
ESDに関する最新の取り組みの紹介や、環境、人権などさまざまなESDを推進する団体へもリンクしています。
- 内閣官房 「ESDの10年」 関連ページ  
[www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/index.html](http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/index.html)  
我が国における「ESDの10年」実施計画をダウンロードすることができます。
- 外務省 「ESDの10年」 関連ページ  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/wssd/wssd.html>
- 環境省 「ESDの10年」 関連ページ  
<http://www.env.go.jp/policy/edu/desd.htm>  
「ESDの10年」ガイドラインをダウンロードすることができます。
- 文部科学省 「ESDの10年」 関連ページ  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/jizoku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/jizoku/index.htm)
- ユネスコ 「ESDの10年」 関連ページ  
[www.unesco.org/education/desd](http://www.unesco.org/education/desd)

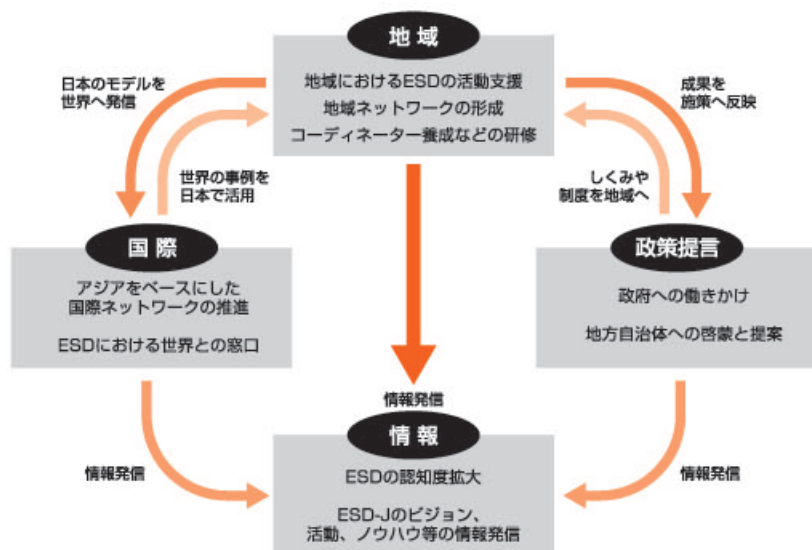




ESD-Jは、2005年から始まった「ESDの10年」を追い風として、日本における持続可能な社会の実現に向けた教育を推進するため、社会の課題を扱う教育に関係するNGO、NPOなどの組織や、個人の動きをつなぎ大きな力としていくことを目指して、2003年6月に発足したネットワーク団体です。

### ESD-Jの活動

- ✦ 地域におけるESDの活動支援、つなぐ仕組みをつくる地域ネットワークづくり
- ✦ より良い政策や、具体的な取り組みを実現していくための政策提言
- ✦ ESDのセミナーやコーディネーター養成などの、研修および普及啓発
- ✦ ウェブサイトや季刊誌「ESDレポート」など各種メディアによる情報発信
- ✦ ESDに関するアジアをベースにした国際ネットワークの推進



### 入会のおすすめ

ESD-Jでは、活動の輪を広げ、その成果を高めるために、共に活動して下さる会員を募集しています。ESDは明確な答えのない課題だからこそ、その発展には多くの知恵やエネルギーが必要です。ESDに興味がある、必要性を感じている、そんな団体・個人はどなたでも入会できます。会員として参加し、あなたの意見をESD-Jに反映させてください。そしてESD-Jのネットワークをあなたの活動に活かしてください。

### 会員になったら…

- ・ 会員専用のメーリングリストを利用できます。
- ・ 年4回「ESDレポート」などESDに関する最新情報をご提供します。
- ・ ESD-J主催行事に会員価格で参加できます。
- ・ ESD-Jのさまざまなプロジェクトチームの活動に参加できます。

### 正会員は…

総会において議決権を有します。  
選挙で選ばれる理事に立候補することができます。

	団体年会費	個人年会費
正会員	一口10,000円(一口以上)	10,000円
準会員	3,000円	
賛助会員	一口50,000円(一口以上)	

### 入会のお申し込み

申し込み用紙をESD-Jのホームページ (<http://www.esd-j.org/invitation/>) からダウンロードして、必要事項をご記入の上、下記までお申し込みください。E-mailでのお申し込みを歓迎します。またインターネットが使われない方は、事務局までFAXまたはお電話でお申し込みください。

### ■お申し込み先

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)事務局  
〒151-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F  
E-mail:nyukai@esd-j.org (入会専用メールアドレス)  
TEL:03-3797-7227 FAX:03-6277-7554

●執筆者一覧(50音順)

- 伊藤 伸介 ● (社)農山漁村文化協会  
(第3章:みそこし応援団執筆)
- 伊藤 通子 ● ESD-J 理事、富山工業高等専門学校 職員  
(第3章:山古志村執筆)
- 岩本 泰 ● 東京学芸大学 非常勤講師  
(第2章執筆)
- 小栗 有子 ● 鹿児島大学 生涯学習教育センター 助教授  
(第1章執筆)
- 佐藤 真久 ● 武蔵工業大学環境情報学部 専任講師  
(第1章執筆)
- 清水 玲子 ● 山陽新聞社  
(第3章:えひめグローバルネットワーク執筆)
- 新海 洋子 ● ESD-J 理事、EPO中部 チーフプロデューサー  
(第3章:富山工業高等専門学校執筆)
- 村上 千里 ● ESD-J 事務局長  
(第3章:浜松NPOネットワークセンター執筆)

●編集

- 山本誉真奈 ● フリー編集/ライター
- 村上 千里 ● ESD-J 事務局長
- 佐々木雅一 ● ESD-J 事務局

●イラスト

志賀いずみ

●デザイン・レイアウト

西海 友子

●監修

阿部 治 ● ESD-J 代表理事、立教大学社会学部 教授

Panasonic&EFF環境サポーターズ☆マッチング基金・助成事業

わかる!ESDテキストブック シリーズ1 基本編

## 未来をつくる『人』を育てよう

2006年12月20日 初版第1刷発行

■編集・発行

NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

Tel:03-3797-7227 Fax:03-6277-7554

E-mail:admin@esd-j.org

URL:www.esd-j.org

■印刷・製本

株式会社 光陽メディア